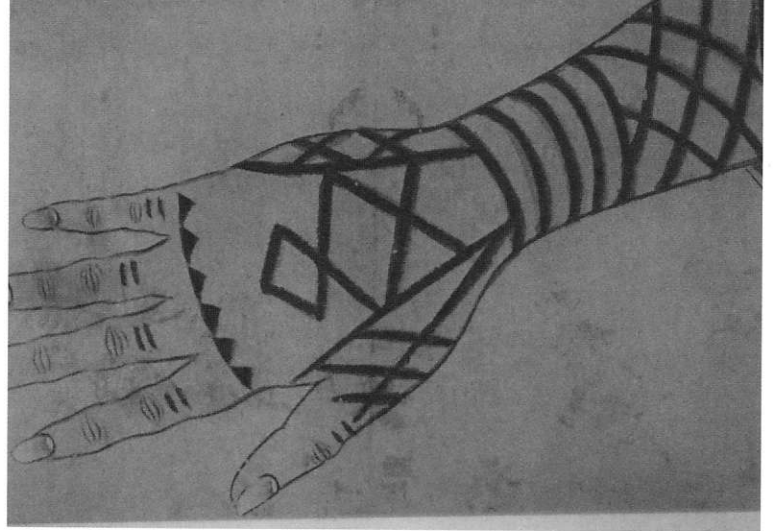




アイヌの女性の入れ墨

いた場合、その子グマをいずれイオマ
ンテで送る「神の子」として大切に育
てます。

子グマはヘペレ・セツ(子グマの檻)
と呼ぶ丸太小屋で一〜三年間飼われた
後の晩秋、着飾られ、美しい文様が刻
まれたヘペレ・アイ(子グマ・花矢)
を受けてこの世での命を失います。

イオマンテは子グマにとって自分の
故郷(神の国)へ帰る喜びの時でアイ
ヌによって魂を解き放たれる儀式で
す。神の世界へと旅立つ子グマは肉や
毛皮を土産にコタンにおいて、その変
わりに人から貰ったお土産を沢山背負
い、着飾られたまま神の国に帰ってゆ
くと考えます。

子グマの霊が神々たちに「ワタシは
こんなに手厚く祭られて天に送られま
したよ。」と告げることによって天上
の神々たちが人間界にまた来たいと思
ってくれると信じられていたのです。

アイヌの神に対する祈りは沢山の食
べ物の到来を約束させる重要な契約
で、生き物によって自分たちが生かさ
れていると信じていました。

その道具として言葉を神に伝える
「煙」、神からの返事や気配を依せつけ
る「イナウ」(神幣)なども重要な
「機能」でした。

4. 海の民、交易の民

アイヌの人びとが歴史書に初めて登

場するのは『日本書紀』六五七年阿倍
臣(あべのおみ)が朝廷の命を受け、
本州北部の蝦夷を討ちに遠征したとい
う記述です。

そこには「胆振(金且)」「(いぶりさ
え)」「後方羊蹄(しりべし)」など現
在も北海道に残る地名が書かれていま
す。これ以降、一般に記録に現れるよ
うになるのは室町時代の頃ですが、人
類学的にみると縄文前期の約六千〜五
千年前の東釧路人くらいまで遡れると
いわれ、考古学的には縄文、続縄文に
続く擦文文化の中にいわゆるアイヌ文
化に連なる要素が認められています。

アイヌ文化の根底にはこうしたいわ
ゆる縄文時代、続縄文時代と形成され
てきた在地の文化に八世紀前後東北北
部から北海道の道南、道央へ移住した
集団がもたらした文化がミックスされ
た「擦文文化」と紀元前七世紀から十
三世紀にかけて流水と同じ海流で南下
してきた人々が運んできた文化が道北
から道東にかけ拡がって形成された
「オホーツク文化」とが互いに影響し
あい、融合し、共生してきた、とい
うのがほぼ定説となっております。

一〇世紀前後になると、それまで流
動的だった北海道と本州、北海道と北
方圏との文化的な境界が主に交易によ
って次第に固定化され、互いの文化的
差異が拡大していきます。そこに他の
地域とは違った「北海道集団の文化的
な価値」、現在我々がアイヌ文化と呼

んでいる文化が形成されていったもの
と考えられます。

但し、それらの文化形成は必ずしも
一様ではなく、それぞれ文化圏(自然
環境も含む)が近いところの影響がよ
り濃く反映され、道南アイヌには和人
的な形質が、道東アイヌにはオホーツ
ク文化的形質が色濃く遺っておりま
す。アイヌの祖先は本来海の民であっ
たと考えられ、北海道へ定住しても彼
らの文化の中には海の民としての情報
が途絶えることなく続いていたと思わ
れます。

彼らの伝統装束の文様に見られるシ
ヤチの背ビレはシャチ・レブン・カム
イ(海の沖にいる神)が海にいる大き
な獲物クジラ・フンペ(フンと音を出
すもの)を我々の処まで連れてきてく
れる、大いなる神であるということを
ものがたり、女性達の腕から手の甲に
向けて彫られた鱗にも似た入れ墨は九
州の安曇族や隼人族などの海洋民族に
よく見られ、海の神々に自分たちは仲
間だと知らしめる徴だと考えられま
す。アイヌは好奇心旺盛で定住してい
てもその土地の中で自分たちが得る収
穫だけではなく、巧みに舟を操り、男
達はクジラやトドなどの大きな獲物を
獲得し、女達は海女として貝や海藻な
どの海の恵みを得ていました。

そしてさらに大海原へ出かけては多
くの民と交流をなし、交易までこな
していたとされています。

交易には高い知性と相手との信頼関係が必要です。彼らには独自の文字文化がなかっただけで、話し言葉は勿論のこと、文書を交わすことも多々ありましたから、実際には多くの言葉、文字に通じていたようです。

また、交易は信頼によってなされるもので、信頼はアイヌ文化に対するアイヌの人の誇りであり、彼らの先人達と神によってもたらされた知恵による、自信と威厳でした。

また、十八、十九世紀になると、アジアから日本への文化伝播ルートは中国から朝鮮半島を経て九州、本州へ入る以外に北回りの文化伝播ルートによる交易が為されていたことがわかっております。

この北回りの交易、中国東北からアムール、樺太を抜けて北海道へ至る道は頂点を極めました。

山丹交易と呼ばれたこれら北回りの交易はサンタン人という担い手によってなされ、絹と毛皮という二大商品を同時に往来させたことにおいても注目されています。

絹、毛皮という商品を扱うことによって、彼らの莫大な資産は清朝の経済基盤を支え、ロシアからの侵略を阻止し、江戸時代の日本にも多大なる影響を及ぼしました。

この時代、アイヌとサンタン人は互いに舟を駆使して、互いの地を行き来していたと考えられ、松前藩がサンタ

ン人のもたらす招来品に目をつけ、立ち入る以前はまともな交易がなされていたようです。

そもそも中国からの輸入物の多くは長崎から輸入されており、南ルートで簡易に入っておりましたが、北回りの品々の方が浪漫を掻き立てられたのでしょう。同じような品であっても貴重とされたようです。

やがて、松前藩はサンタン渡来品の献上をアイヌに強制し、それがアイヌの辛苦の一つになり、度重なる和人の戦争へと発展していったのです。

5. 最後に

過日亡くなった萱野茂氏が住んでいた二風谷の沙流川流域には観賞用の石が採掘されている場所があります。

彼らが狩猟民族としての生活文化を変えなくてはいけなかった際にその地域の石のおかげで経済的に生活ができたというアイヌのひとびとの感謝とともに、ある碑が建てられています。

萱野茂氏と貝澤正氏というアイヌの両氏が金田一京助氏に依頼した銘文を添えて。

物も言はず声も出さず
石はただ全身をもって
おのれを語る

遠軽町教育委員会提供

白滝地域は東洋でも最大級規模の黒曜石原産地である。北海道内をはじめ、東北地方やサハリン、ロシアの遺跡からも白滝産地黒曜石の出土が確認されていることから、当時は白滝を中心とした流通ネットワークが存在していたと考えられる。

